

## 2 河内国府肥後轟貝塚等にて発掘せる人骨に就て報じ併せて

### 石器時代の住民に及ぶ

医学博士 鈴木 文太郎

余は大正六年六月本学文科大学の濱田教授の一行に随ひ、同僚足立博士と俱に、其後鳥居龍藏氏発掘に係る小金井博士調査（人類学雑誌第三十二卷第十二号「河内国道明寺大字国府字乾の石器時代遺跡より発掘せる人骨に就いて」）の人骨を採集せられたると同一地点に於ける発掘に参加し、同じく人骨を採集し、又同年五月熊本県宇土郡轟村貝塚にて同地方庁の特別の厚意と熊本医専の川上、山崎両学士の案内と助力とに由り人骨を採集し、現に両者は京都医科大学解剖学教室に所蔵す、其他に猶ほ京都文科大学に大正四年六月文学士内田寛一氏の備中国浅口郡西大島村津雲貝塚にて発掘せる人骨あり、此人骨の一部は既に松本彦七郎氏が動物学雑誌（第二十八卷）に津雲人種と命名し数次記述せるものと同一所に於て発見せるものなりと云ふ。

余が今爰に以上挙げたる人骨に就て報ぜんとするに際し予め諒知を得んとするは、只其一部の骨骼の概報に止むるにあり、実は此等人骨の全般に渉り記述せんには先づ十分なる比較資料の準備を要するも余の現下の事情は到底夫れのみで没頭を容さざるが為めなり。

熊本県宇土郡轟村にて獲たる主要なるものは該地貝塚にて余躬ら発掘せるものなり、此人骨は男女の二軀と是より以前に同一地にて川上、山崎両氏の発見せられたる頭骨破片、肢骨其他同地小学校に在りたるもの等若干とあり、内男骨は頭蓋を除けば殆んど全身のもの具足し女骨は頭蓋の一部は復旧するを得たるも、残余は多く破片にして、僅かに肢骨の一部具存するに過ぎず、概して同地採集の人骨は男女俱に造構纖弱なり、男骨に就ては頭骨、手骨及び足骨を除けば、殆んど計測せるも、対比資料を欠くを以て、今は其一部の数を示すに止む。

河内国国府のものは男骨一軀、他に二軀若しくは三軀の混合にして性別、所属など十分判然ならず、頭骨は総べて僅かに破片を残すに過ぎざるも、余は主として肢骨を存す、其構造は概して屈強なり。

備中津雲貝塚のものは頭骨三個の他、軀幹骨、肢骨約一軀分あり、恐らく三個の頭骨中の一個は此の軀幹骨等と同一体のものならんと察す、頭骨は土壤と塊結せるまゝなりしも総て余の手にて復旧せり、而して頭骨中其一は老年者（表中Bと記せるもの）のものにして矢状縫合及び三角縫合の一部共に杜塞せるが為め、能く土中にありて破壊することなく、頭蓋の概形を保全せるも、基底部分は全く破壊欠損し、其二是壮年者（表中Aと記せるもの）のものにして上下より痛く圧せられ、顱頂骨は破摧し、頭蓋腔内に陥没し、基底部分も腔内に没入し、顱顱部は外方に排出し、辛く復旧を行ひたるも、到底信ずるに足るべき計測を施す能はず、其三是猶ほ破摧欠損の度甚しく、只肢骨中少しく完全なるものあり、骨骼の造構は概して強大なり。

以上の諸骨を集め其内より稍々計測に適するものを選び、左記の数表を編成せり、されど頭骨の如き形状不完全にして其僅かに一二過ぎず、又下齶骨、肢骨等の如き殆んど数片に折損せざるなく、総て人工を加へ接合せるものにして、其計測数の如き必しも正確を期すべからざるや固よりなり、又対比資料としては主として余が京都解剖学教室の標本に就て躬ら計測せるものに拠る、但し頭骨を除く、即ち二十二乃至五十六歳の男、二十乃至五十四歳の女各三十人の平均中数にして、其詳細は余が著人体系統解剖学第一巻を参照せよ、又表の数字中特に本報告を草するが為め、四捨五入の換算をなせるものあれば、一二の変動あるを諒せられたし、又余が所計の標本の原籍地に就ては、余りに信を措くに足らざるも、参考とし記するときは、山城三十五人、大和六人、紀伊近江各三人、余は区々たり、又余の計測中若しくは従来諸氏の報告中、対比を欠くものは、今は補充の違なく、其不備を告白し、後来の研究に待つ他なし、現代アイノ人に関する数字は、

余は何等の経験なく、全然小金井博士の計測数に拠る。

前期数表に就ては單に計測の実況を示すに止め、比較結果の如何は総て読者の意向に一任せんと欲し、強て結論の如きを試みざるべし、是れ所検人骨数の僅少なると、発見地の区々なるとに由り、反て誤謬に陷るの惧あればなり、従て平均中数を示めざるも亦同一理由に基く。表中下肢に於ける一二の数は日本人並びにアイノ人の数とは多少差隔を見るは、或は時代の相違より来りたる現象なりや測り難し、脛骨匾型、後俯及び傾斜角度の大なるが如き必しも石器時代人類の専有なりとせず、現代と雖も未開民族に共通する点より看るも、文化の進歩と是れに伴ふ生活状態の変遷とは、時代と俱に体形上多少の影響なきを保せず、是れ又生物進化の信条よりするも敢て不可能ならざるべし、従て瑣細の差違に就て云々するは大いに学者の慎戒を要すべきものとす。

小金井博士の言明せられたるが如く、国府人骨の現代アイノに一致若しくは近似するは、是れを疑ふにはあらざるも、互に計測手法の差違あるを免れずして、余の計測を通覧するときは国府人骨中、特に大腿骨体中央部の矢状横径率数の多大なるものを除けば、現代日本人の差隔範囲内にありて敢て背馳せざるものあるは、是れ又疑ひなきものとす。

其他国府人骨と俱に発掘せる(一)遺物中石器、土器、祝部等の他に玦様の耳輪などを包有せること(遺物に就ては濱田教授の詳報ある筈なり)(二)人骨姿位の状況等を総合考較するときは、今果してアイノ祖先に類似の事実ありや否やは詳ならざるも、少くとも現代アイノとは関係なきは明白ならんと信ず。

就中人骨姿位の如き、余が轟村貝塚及び河内国府に於て経験せる事実は全く同一軌にして悉く仰臥し、下肢は股関節及び膝関節に於て屈折し、膝を樹て(内には土層の重量の爲め崩壊せると察せらるゝものあり)、恰も蹲踞の姿勢をなすが如く、上肢は肘関節を屈折し、両手を互に組みて胸上に安置せり、又河内の同一地点に於て大阪の大串博士の発掘に係るもの(同氏の談話に拠る)及び津雲貝塚(内田文学士も亦曾て此姿勢に注目せられ喜田博士など議論ありたりと云ふ、但し考古学教室梅原囑托の談話に拠る)のものも亦同様なりと云ふ、是れ現代アイノ人の埋葬習慣とは少しく相違あるものゝ如し。

此に由り是れを観るときは、国府の人骨発見地は現代アイノと関係なきは殆んど疑ひを容れず、且つ其夥しく人骨の群在せると遺物の種類、様式等とより推考するときは、恐らく古墳時代若しくは其近き前後に於ける庶民の埋葬地域なりしや疑ひなかるべく、従て其人骨の現代アイノ人に一致若しくは近似すと云ふ小金井博士の所説は、或は所謂似て其非なるものにあらざるなきを保せず。

終りに臨み我石器時代の住民に就て一言愚見を述べんとす、元来此問題に関しては曾て坪井博士はコロホツクル説を唱へ、小金井博士は之れに反しアイノ人説(同氏著「日本石器時代の住民」明治三十七年東京春陽堂発行)を唱へられたり、されど両者の所論を見るに未だ首肯に足るものなきを遺憾とす、就中体形的人類学の方面に於ける小金井博士の當時を見るに、僅かに上膊骨、大腿骨、脛骨の三種の長大なる肢骨に於ける計測に基き、一方諸家の所説を引用し論拠を構築せられ、考古学上アイノ人の石器使用者たるを力説せられたり。

要するに是れ主としてコロホツクル説に抗弁するの爲めならんなりと雖も、独りアイノ人の石器使用を是認するのみを以てしては、未だアイノ人先住の立論上毫も効果を認むべからず、必ずや同時に日本人祖先の石器使用の有無を決定するの要なかるべからず、然るに其事なきが如し、今若し現日本人の祖先の石器使用を否定するの立証確固となるに至れば、求めずしてアイノ人先住説の成立を見るべきものとす、然らざれば石器の果して孰れの民種に属するかの判定をして不可能ならしめ、コロホツクル説の架空なると同じく、アイノ説も亦其論拠の極めて浅弱なるを覚ゆる所以なり、況んや解剖学上の事実にして未だ深く傾聴に足るものなく、又本邦の考古学上の知見を拡充するに従ひ、日本人祖先の石器使用は漸く疑ふべからざるに至れる

に於てをや。

由来考古学者流の研究方法を看るに、任意の傾向を示し、多く自家の嗜趣に駆られ、未だ同一遺跡より其遺物の全般を挙げて考較する方法に出でざりし嫌なき能はず、所謂アイノ式、弥生式等の命名、類別の如き、偶々其弊を露したるものにして、先住民問題上多少の累を及ぼしたるやも測られず。

今若し考古学をして真に組織的學術たらしめんには須らく任意の拾捨を廃し、凡て一处の遺跡より発掘せる遺物は地層を逐ふて類別し、包含物の全部を挙げて採集するの必要を覚らざるべからざると同時に、人類の遺骸にして存するものあらば、細心注意して悉く俱に採集し斯の如くして遺跡の分体、遺物の分類等を考定し、爰に始めて意義ある結果を得るものとす、されど従来如く濫掘是れ事とし、更に整理を等閑に付するに於ては、単に學術上貴重なる遺跡を荒廃せしめ、遺物を散逸せしむるに過ぎず、到底斯学の進歩は得て望むべからざるなり。

又一方に体形的人類学上に関する現代日本人の調査に就ては現今の状況猶ほ頗る幼稚にして準拠に足るべき何等正確なる資料ある事なく、斯学上先住民問題の如きを論議せんとするに際し、僅かに断片的資料に拠り是非を決せんとするよりは、先づ十分信拠に足るべき比較資料をして整理充実せしむるを第一要義となさざるべからず、今余の所見を以てせば、少なくとも東北、関東、北陸、近畿、中国及び九州等の地方に於ける現代日本人の骨骼に就て、協定的方法に準拠し、秩序ある計測を施行し、日本人間に於ける異同及び差隔を究明し、次で時代的相違の有無を検し、或は他民族との比較に資すべきものとす、而して今日迄は我学界に於て斯の如き企図ありたるを知らず。

元来人類学と考古学とは恰も、輔車唇齒の關係にして、一民族の研究上、其一を欠きては到底完全なる知識を得べきものにあらず、組織あり秩序ある研究に由り兩者互に提携し、以て斯学に貢献するにあらざれば、真理の啓発は得て望むべからず、而して其最も必要なるは各本領に応じ、基本的研究方法を統一協定するにあり、若し同一事項に対し、各自任意の方法に拠り研究調査に従事せんか、其結果頗る紛雜し、相互の考較の便を失ひ、多大の労費も遂に其効を失ふこと尠しとせず、爾来余は学者の協定的事業を促したること一再にして止まらざるも、常に失敗に帰せるは慚愧に勝えず、而して其原因の果して本邦学者のあまりに自家の功名心に執著なるにありや、或は研究の真義を解せざるにありや、或は懶性勞を吝しむにありや、三者恐らくは其一にあらん。

以上縷述するところを以てせば、我学界の現状は未だ先住民の如何を論決するに足るの資料を欠き、従つてアイノ先住説の如き、猶ほ幾多の洗練拡充に待たざるべからず、況んや南洋民族の移來の如きに於てをや。

更に以上に拠り先住民に関する余の臆想を述べんに、余は我邦土に人類創生の当初は暫く論外とし、他に重大なる理由の存せざる限り、我邦石器時代は既に今日日本人と称するものゝ祖先の栖息し、石器、土器等を製し、又は使用し、我史上諸種の部属を示すは畢竟同一民族の各地に割拠せるに他ならずして、遂に今日に伝承せるものと想定するの正当なるを信ぜんとするものなり、而して辺境にありては隣接諸民族と交渉ありて、多少の混淆を見たるは、是れ又疑を容れず、而も人類發達の過程たる石器使用の時代を超化せるが如き、文化程度を有する民族の突如として現出し、我邦土の主權を占めたるにはあらず、是れ遺跡、遺物の漸遷なる事實に徴すべく、古く日本の国土に栖息し、石器を使用せる日本民族の或る部属にして、特に支那朝鮮の如き大陸民族文化に接し、夙に感化發達を遂げたる優秀者の建国統一したるものならんと信ず、但し余の所謂日本民族とは固有日本民族を指すものとす。

而してアイノ人に至りては其俗の大いに北方民族（西比利亞、北欧等を指す）系と共通するの点より推考するときは、北方寒帶地の郷土より南下し來り、遂に日本民族と触接せるものゝ如く、其南下時代も遙かに日本民族の建国に晩るものにして、決して温帯地方に発跡し北退せる民族ならざるが如し、又其触接界線は恐らく津輕海峡を上下せるなるべく、是れ寒温兩帶なる生物界の分体上、特殊の限界線の同じく津輕海峡

に存するより類推するときは、人類と雖も当さに此の關係なきを保せず。

又我史上に蝦夷と称するものは、恐らく現代アイノと同一視すべきにあらず、或は反て日本民族の一部属にあらざるや、余は此疑義に就ては長谷川博士と感を俱にせんと欲す、又晦昧誇張なる古史浮動なる言語等は一程度迄は無論信重すべきなるも遂に其範圍を超絶する事蹟に就ては、反て揣摩臆測に陥るを以て、博く人類一般の発達経程に準照し、事實に拠り推考判定するは、当さに現代科学的研究の真髓たるべし。

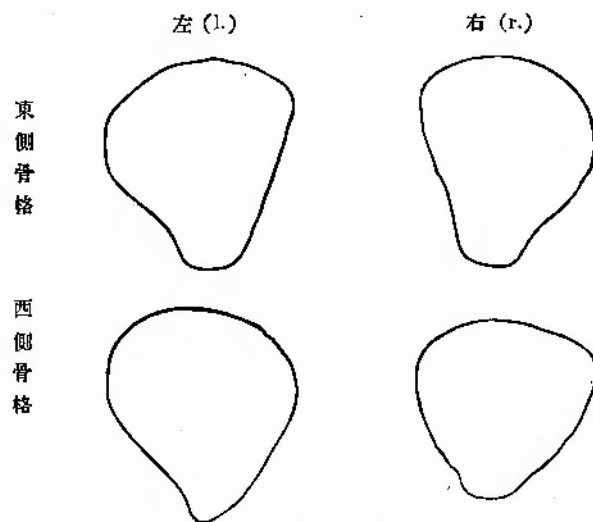


Fig. 9. Transverse Sections of Femora, Kō Skeletons.

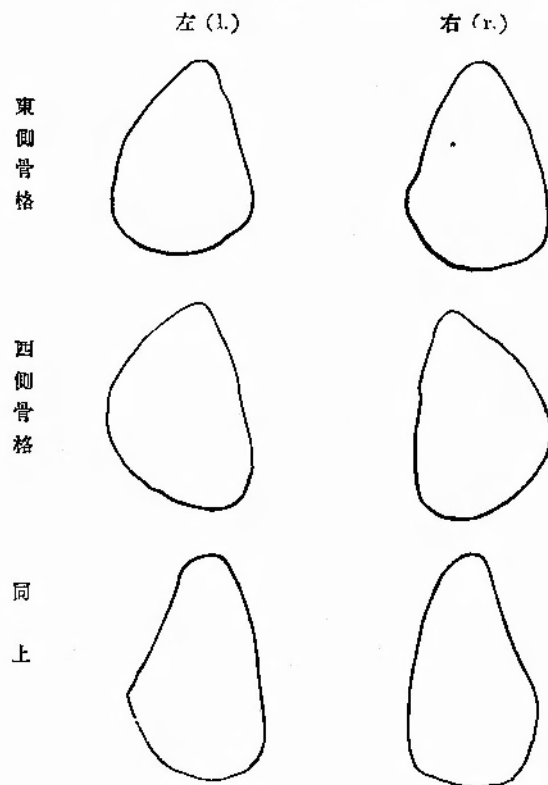


Fig. 10. Transverse Sections of Tibiae, Kō Skeletons.

第九圖國府發見大腿骨體中央斷面圖

第十圖同上脛骨體中央斷面圖

第十一圖 1 龜貝塚發見頭骨 2 津雲貝塚發見頭骨



3



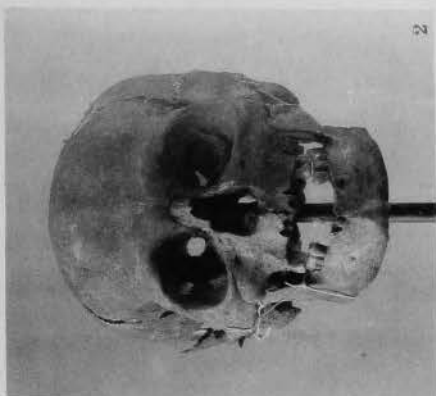
3



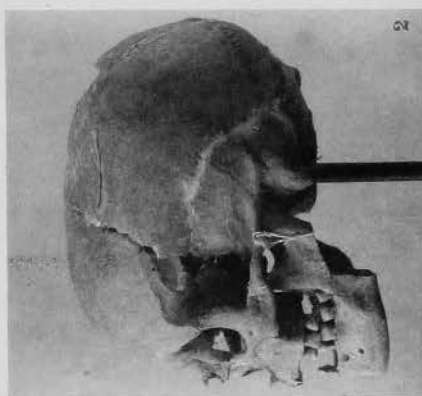
2



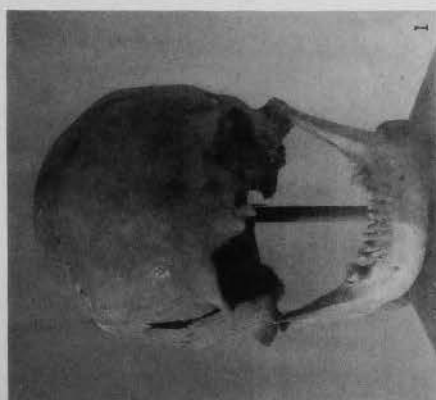
3



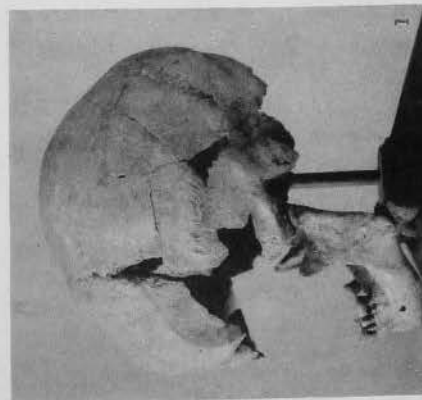
1



1



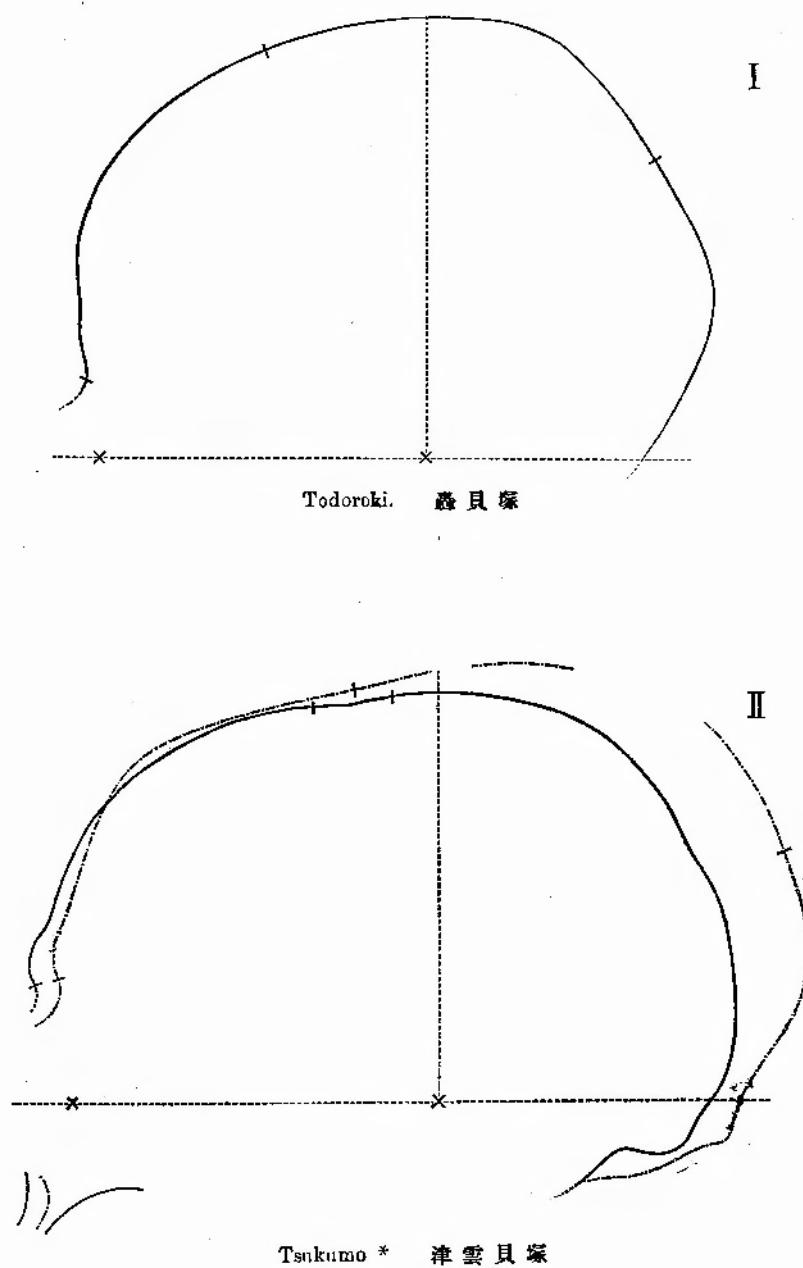
1



1

Fig. 11.—1. Skull found at Todoroki. 2, 3. Skulls found at Tsukumo.

Fig. 12. Outline Tracing of Norma lateralis of the Skulls found in Shell-mounds, at Todoroki & at Tsukumo.



\* Dotted line is of A & the other line of B in Table I.

第十二圖 轟及津雲貝塚發見頭骨正中匡線 (鈴木博士)

虚線ハ第一表中A實線ハ同Bニ屬スルモノ

第一表

Table I

頭 骨	轟 女	津 雲		現代日本人		現代アイヌ*		Cranium
		A 男	B 男	男	女	男	女	
最 大 長 径	168	(198?)	189	178.4	169.5	185.8	177.2	Grösste Hirnschädelänge
最 大 幅 径	133	—	144	141.1	137.6	141.2	136.8	Grösste Hirnschädelbreite
率 数	79.2	—	76.2	79.2	81.3	76.5	77.6	Längen breitenindex
耳 高	118	(115?)	109	—	—	119.3	115.0	Ohrhöhe
地 平 周 廻	490	—	540	505.8	487.6	522.5	501.7	Horizontalumfang
前頭最小幅	88	100	113	91.8	92.9	93.2	92.4	Kleinste Stirnbreite
上 齶 幅	—	97	103	98.3	94.6	—	—	Mittelgesichtsbreite
上 顔 面 高	—	66	68	70.3	66.9	69.8	65.5	Obergesichtshöhe
鼻 高	—	51	49	51.4	48.2	50.5	47.4	Nasenhöhe
鼻 幅	—	25	(39?)	25.3	24.8	25.6	24.7	Nasenbreite
率 数	—	49.0	(76.6?)	49.0	51.6	50.7	52.1	Nasalindex
眼 窠 最 大 幅	—	40	40	40.1	38.6	40.9	39.8	Grösste Orbitalbreite
同 高	—	34	33	34.6	34.5	34.9	33.9	Grösste Orbitalhöhe
率 数	—	85.0	82.0	86.5	89.6	85.3	85.2	Orbitalindex
	♀ Todo- roki	♂ Tsukumo	♂	♂ Japaner (recent)	♀	♂ Ainu* (recent)	♀	

\*小金井氏ニ拠ル

\*Nach Koganei

第二表

Table II

下 齶 骨	轟 女	津 雲		国 府		現代日本人		現代アイヌ*		Mandibula
		(A) 男	(B) 男	男	女	男	女	男	女	
小 頭 間 距 離	—	(122)?	—	—	—	—	—	—	—	Kondylenbreite des Unterkiefers
下 齶 角 間 距 離	96	—	97	(98)?	—	97.2	92.5	102.0	95.6	Winkelbreite des Unterkiefers
頤 高	27	30	22	(27)?	(23)?	—	—	33.8	32.6	Kinnhöhe
枝 最 小 高	48	(r.) 51(右)	(r.) 48(右)	45	48	48.5	42.1	—	—	Kleinste Asthöhe
同 最 小 幅	28	(r.) 35(右)	(r.) 38(右)	30	34	33.4	31.4	—	—	Kleinste Astbreite
率 数	58.3	68.6	79.2	66.7	70.8	69.0	70.0	—	—	Index des Unterkieferastes
下 縁 厚	9	13	9	8	11	—	—	—	—	Dicke des corpus manibulæ
下 齶 角 度	128°	(r.) 127° (右)	(r.) 120° (右)	125°	128°	123° †		125°	123°	Winkel des Unterkiefers
	♀ Todoroki	♂ Tsukumo	♂	♂ Kō	♀	♂ Japaner (recent)	♀	♂ Ainu* (recent)	♀	

† \*小金井氏ニ拠ル

\*Nach Koganei †Nach Bältz

第三表

Table III

上 膊 骨	轟						津 雲		国 府		現代日本人		現代アイヌ人*		Humerus	
	男		女		1. 右	2. 左	3. 左	男 右	男 左	男 右	男 左	男 右	女 右	男 右		女 右
最 大 長	266	(260?)	—	260	—	—	—	294	292?	—	—	294.3	273.2	295.0	273.9	Grösste Länge
生 理 的 長	262	—	—	—	—	261	—	291	—	—	—	289.7	269.3	—	—	Ganze Länge
上 幅	40	—	—	—	—	41	—	47	46	—	—	45.3	41.9	47.6	43.2	Obere Epiphysenbreite
下 幅	48	49	50	—	—	—	—	58	—	—	—	58.4	50.6	59.5	54.6	Untere Epiphysenbreite
体 最 大 径	18	17	18	18	17	21	18	23	23	20	20	21.2	17.2	22.6	21.0	Grösster Durchmesser der Mitte
同 最 小 径	14	14	14	14	16	15	15	17	18	13	13	17.6	15.2	17.3	15.7	Kleinsten Durchmesser der Mitte
率	77.8	82.4	77.8	77.8	94.1	71.4	83.3	73.9	78.3	65.0	65.0	83.0	82.7	76.5	74.8	Diaphysenindex
最 小 周 廻	54	58	52	52	—	60	54	65	67	56	56	62.3	52.9	63.2	56.1	Kleinste Umfang
捻 転 角 度	157°	—	—	—	—	168°	—	149°	—	—	—	153.7°	168.4°	—	—	Torsionswinkel
	♂		♀		Todoroki		Tsukumo		Kō		Japaner (recent)		Ainu* (recent)			
	r.	l.	r.	l.	r.	l.	l.	r.	l.	r.	l.	r.	l.	r.		l.

\*Nach Koganei

\* 小 金 井 氏 に 拠 る





第五表

Table V

脛 骨		轟								津 雲		国 府						現代日本人		現代アイヌ人*		Tibia
		男		1. 右	2. 左	3. 右	4. 左	男		1. 左	2. 右	3. 左	4. 右	男 右	女 右	男 右	女 右					
								右	左													
最 大 長	右	321	—	—	—	332	—	—	—	—	—	—	—	—	—	331.9	307.1	—	—	—		
	左	304	305	—	—	316	—	—	—	—	—	—	—	—	—	311.5	389.5	—	—	—		
生 理 的 長																						
体 矢 状 径		26	26	27	28	27	26	32	32	27	26	30	30	27	27	28.2	23.2	30.9	27.5	Sagittaler Durchmesser der Mitte		
同 横 径		20	18	20	21	18	19	19	20	20	20	20	20	20	20	21.0	18.6	19.4	17.8	Transversaler Durchmesser der Mitte		
率		76.9	69.2	74.1	75.0	66.7	73.1	59.4	62.5	74.1	77.0	66.7	66.7	74.1	74.1	74.8	80.0	62.8	64.7	Index cuenicus		
同 周 廻		70	69	76	80	73	75	84	85	72	70	80	80	73	73	78.2	66.1	81.6	73.4	Umfang der Diaphyse		
捻 転 角 度		13°	14°	—	—	7°	—	—	22°	—	—	—	—	—	—	14.1°	9.2°	—	—	Torsionswinkel		
	内	14°	17°	—	—	17°	—	—	7°	—	—	—	—	—	—	12.3°	14.4°	—	—	Retroversionswinkel		
傾斜角度		10°	13°	—	—	13°	—	—	12°	—	—	—	—	—	—	9.1°	10.7°	—	—	Inklinationswinkel		
	裸																					
	r.	l.	r.	l.	l.	l.	l.	r.	l.	r.	l.	l.	r.	r.	r.	r.	r.	r.	r.			
	♂		1	2	3	4		♂		♂		♂	1	2	3	4	♂	♀	♂	♀		
	Todoroki								Tsukumo				Kō (Dōmyōji)				Japaner (recent)		Ainu* (recent)			

\*Nach Koganei

\* 小 金 井 氏 二 拠 ル